



# こんぴらさん障壁画の謎

—若冲・岸岱をめぐって—

## 【第5章】

# 宥存

〔宝暦11年(1761)2月18日入院～天明7年(1787)10月8日遷化〕

金光院奥書院障壁画を、なぜ京の画家である伊藤若冲が描くことになったのであろうか。

金毘羅の歴史に精通し当宮図書館に勤務した松原秀明氏によると、金毘羅大権現第10代別当である宥存は元文4年(1739)京都に生れ育ち生来絵事を好んだので若冲について学んだという<sup>1</sup>。

宥存は京都二条城の与力を勤めた柳下忠次良貞常(第8代別当宥山の弟)の息男として元文4年(1739)11月26日京都に生まれた。俗名を山下弁之進といい、宝暦5年(1755)5月1日、後住に決まり名を亀丸と改める。宝暦5年(1755)9月21日、得度。猶父は姉小路大納言公文。宝暦11年(1761)2月18日金光院入院。實道房と称し、眠山、如獅、巴桐などと号した。画を能くす。天明7年(1787)10月8日49歳で遷化した<sup>2</sup>。



伝円山応挙筆 宥存尊師御影(琴陵家蔵)



当宮史料の宥存事項に若冲のことは記されず、山下家の家譜にふたりの関係が記録されているのか定かではないが、宥存が若冲に師事したのであれば、宝暦11年(1761)に宥存が金毘羅大権現別当に就任したことを契機として障壁画制作が依頼されたのだろう。

明和元年(1764)というと、《動植綵絵》の制作最中である。しかし、かつての教え子が立派な社僧となった喜びとお祝いの気持ちもあり、引き受けたのではないだろうか。

『讃岐画家人物誌』に「僧 宥存 琴平金光院ノ住職画ヲ狩野

氏ニ学フ」と記され、『金刀比羅宮応挙画集』は宥存について「絵画を嗜み、自らも狩野風の絵を能くし、其描ける百鬼夜行絵巻摸本、蕭湘八景図、鶏図、鷹図等現存す。」と記す。土居氏は宥存筆《鷹図》を見て「画技はなかなか達者であり、鷹の写実感豊かな描写も素人の域を脱している。そして色彩や構図法には、いかにも若冲の門人らしい装飾の特色が看取されるのである<sup>3</sup>。」と述べている。伊藤氏も「完璧にプロフェッショナルな技術力とは言い難いものの土居氏も言うように素人の域は完全に超えている<sup>4</sup>」と評し、止まり木は伝徹宗《白鷹図》(金刀比羅宮蔵)に依拠して描いていることを指摘している。

京の文化に精通し自ら絵事を嗜んだ宥存は障壁画制作を思い立ったのであろう。別当就任直後に自らの館である奥書院は師である若冲に依頼し、晩年、公的な施設である表書院は応挙に依頼した。先述した通り、文書による記録で書院障壁画の主題継承が確認できるのは、現在のところ宥存が別当に就任してからであり、テーマヘリティッジは宥存が考え出した慣習であるかもしれない。

ちなみに、今の旭社(旧金堂)は、明和8年(1771)に宥存が建立を計画し、74年後の弘化2年(1845)第18代別当宥黙の時代に落

成したことから、いかに大事業であったかが窺える。

伝円山応挙筆《宥存尊師御影》が琴陵家に伝わる。



宥存筆 鷹図



伝徹宗筆 白鷹図



※《宥存尊師御影》は円山応挙筆と伝承されてきたものの無落款のため応挙と確定されていない。しかし、近年発見された天明8年(1788)から寛政2年(1790)にかけての応挙の制作記録といえる日記<sup>5</sup>によると、応挙は寛政元年(1789)に金毘羅別当写像を依頼されており、これが《宥存尊師御影》と思われる。「京都田中大佛師一子相傳之秘書」<sup>6</sup>に、別当肖像画は在任中に尊容を写しておき、遷化後に本図を制作するという慣例が示されている。この慣例に倣えば、応挙が描いた金毘羅別当は天明7年(1787)10月に遷化した宥存であり、伝承作者とも矛盾がない。



旭社(旧金堂)

- <sup>1</sup> ③土居次義「讃岐金刀比羅宮の伊藤若沖」『國華』p.19  
『金刀比羅宮史料』8巻「文化十年金光院日帳」(六月二十日条)に歴代別当の出生が記され、宥存は京都出生とある。
- <sup>2</sup> 『金刀比羅宮史料』33巻「安政六年末八月日雑事御用留」の記事  
『金刀比羅宮史料』□巻「金光院宥存」の記事
- <sup>4</sup> 『町史ことひら 2 近世・近代・現代 史料編』p.275「多聞院日記抜書 前・後」宝暦五亥年之部に  
五月朔日  
一山下弁之丈殿御後住二御究被遊候事  
但御名龜丸様与御改被遊候  
(朱書)  
「宥存様之御事ナリ」  
と記される。
- <sup>3</sup> ③土居次義「讃岐金刀比羅宮の伊藤若沖」『國華』p.19
- <sup>4</sup> ⑤『金刀比羅宮の名宝—絵画』解説p.347
- <sup>5</sup> 川崎博「応挙の日記 天明八年～寛政二年—制作と画料の記録—」(思文閣、2024)から、天明8年(1788)と寛政元年(1789)に関する当宮事項を抜粋すると、「天明八年八月十三日 金皆羅山襖虎書改」「十四日 大虎仕立」「十七日 讃州金皆羅山金光院 大坂屋敷宿守江戸堀二丁目 杉金屋嘉右衛門 右今日飛脚へ出入」「二十三日 讃州金光院の金千五百疋 金二百匹二朱」「寛政元年六月二日 讃州金毘羅山別当殿写像被頼下絵見ル」「十一月二日 金剛院像下絵付ル」「十二月十八日 讃州金光院の金三両」とある。天明8年(1788)8月に金毘羅の襖絵の虎を描き改めており、寛政元年(1789)には金毘羅別当写像の依頼が記され、それぞれ画料が支払われている。  
※応挙の日記については三井記念美術館学芸員藤原幹氏にご教示いただきました。
- <sup>6</sup> 『琴陵家史料』第2巻「京都田中大佛師一子相傳之秘書」や『金刀比羅宮史料』17巻「一子相傳之秘書」[寫本一帖、象頭山に関する京都大佛師田中家の由緒書]、二十六代法眼頼教善榮(正徳年中卒、年七十三才)の記録に「御院主様御代々御画像御存生中二兼而御顔相写置御遷化後本紙相調相納メ来候間此旨相心得候事尤前々より御代々之御像旧記有之」と別当肖像画制作について慣例が示される。

参考文献

- ①松原竹坡「讃岐画家人物誌」香川新報社、1913
- ②『金刀比羅宮応挙画集』金刀比羅宮社務所第一課、1935
- ③土居次義「讃岐金刀比羅宮の伊藤若沖」『國華』1046、pp.11-20、1981
- ④『町史ことひら 2 近世・近代・現代 史料編』琴平町、1997
- ⑤『金刀比羅宮の名宝—絵画』金刀比羅宮、2004
- ⑥川崎博「応挙の日記 天明八年～寛政二年—制作と画料の記録—」株式会社思文閣出版、2024